

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 琉球方言「焼べる」考

著者	ローレンス ウェイン
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	39
ページ	1-9
発行年	2015-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/11795">http://hdl.handle.net/10114/11795</a>

# 琉球方言「焼べる」考

ウエイン・ローレンス

## 1. はじめに

朝日新聞論説委員室（2010）によると、生活様式の変容のために焼べるという動詞は死語になりつつあるという。基本的な意味は〈燃やすために火に入れる〉であって、次の二つの格フレームの中に使われる。<sup>1, 2</sup>

- (i) {薪・石炭・干し草・紙…}を{火・竈・ストーブ・火鉢…}に焼べる
- (ii) {火・竈・ストーブ・暖炉…}を焼べる

「くべる」と同じ意味の単語が多く琉球諸方言にみられるが、琉球方言諸資料では(i)の三項動詞としての使い方が普通で、<sup>3</sup> 二項動詞の(ii)の使用はごく限られているようである。<sup>4</sup>

仲宗根（1983：67）は「くべる」の意味の今帰仁方言形の ?ubi(i)run の項に『全国方言辞典』（東條 1951）の「いびる」（意味は 炙る, 焼く）を関係ある語形として挙げている。また、『日本方言大辞典』（徳川 1989：213）が「いびる」の項に石垣方言の ibi(ru)<sub>N</sub>「火にくべる。燃やす。たく。」を掲載していることから、北琉球方言の ubirun と南琉球方言の ibirun は本土方言の「いびる」と同系統の語形のように考えられているようである。

本稿では琉球方言のこの ubirun/ibirun 系の動詞は本土方言の「いびる」と同系の単語ではなく、むしろ「くべる」と系統を一にする動詞であることを論じる。

## 2. 琉球方言の「くべる」と本土方言の「いびる」

焼べるという意味の ubirun/ibirun 系の琉球方言動詞として次の語形が管見に入っている（地点の配列は北東から南西への順）。

方言	語形	音調型 <sup>5</sup>	出典
奄美大島大和浜	?ubīruri		長田・須山（1977：418）
	?umīruri		長田・須山・藤井（1980：354）
徳之島浅間	?ubijun	A	岡村隆博氏・中島由美氏よりの私信
沖永良部島皆川	?ubijun	A	上野（2005：34）
与論麦屋東	ubjun	A	菊・高橋（2005：112）

大宜味村田嘉里	ubiin	A	ローレンス (2005 : 78)
大宜味村津波	ubiin	A	小川 (2010 : 158)
今帰仁村与那嶺	?ubi(i)run	A	仲宗根 (1983 : 67)
伊江島	ウビユン		伊江島教育委員会私信
大神島	ibiru		中本 (1977 : 91)
伊良部島仲地	ibii		富浜 (2013 : 75)
多良間	ubir	B	青井隼人氏よりの教示
川平	ibirun		中本 (1975 : 41)
石垣	ibi(ru)n	A	宮城 (2003 : 107)
竹富	nbirun	A	ローレンス (2013 : 14)
鳩間	ib(ir)un	A	加治工 (1961 : 35 ; 1989 : 72) <sup>6</sup>
古見	ibin		波照間 (1999 : 709, 719)
与那国	sanbirun		高橋 (1987 : 64)

この ubirun/ibirun と関係があると言われる本土語の「いびる」は由緒ある語である。文献に初めて現れるのは1470年ごろ刊の『文明本節用集』(灸<sup>やいと</sup>の項)であるが、九州ことば(久留米方言)の例は野崎 (1840? : 二) に、東北ことば(仙台方言)の例は猪苗代 (1720) に見られる。ほぼ全国を覆う分布なので、単語が中央から平均で年速一キロで伝播する (徳川 1972 ; 井上 2003) ことから推定すると、文献初出の15世紀よりは500年早く、中古あるいはそれ以前まで遡ると思われる。下に音調型が確認できた現代方言の例を挙げる。

方言	語形	音調型	意味	出典
秋田県	え <sup>ん</sup> びる	B	火中に入れて焼く	秋田教育委員会 (2003)
岩手県吉里吉里	いびる	B	生物等を火に炙る	関谷 (2003 : 43)
静岡県沼津市	ibiru	B	火にあぶる	沼津市教育委員会私信
長野県諏訪市	いびる	B	あぶって焼く	諏訪市教育委員会私信
広島県三次市小童 <sup>ひち</sup>	ibiru	B	あぶって焼く	小童成年会私信
山口県柳井	いびる	B	食物を油で炒める	『柳井地方の方言』 <sup>7</sup>
鹿児島県岡見 <sup>おかちよ</sup> ヶ水 <sup>がみず</sup>	イビッ	B	熱灰に入れて焼く	橋口 (2004 : 200)
種子島	ibiru	B	ゆがく	植村 (2001 : 275)

琉球語の語形と合わせて見ると、北から ibiru (本土)— ubirun (北琉球)— ibirun (南琉球) という周圈的な分布が浮き彫りになり、このことから、北琉球祖語では語頭で \*i- > u- の不規則的な音韻変化があったと考えられそうである。しかし、琉球方言の ubirun/

ibirun を本土日本語の「いびる」に結びつけるのは早計である。それは次の四つの問題があるからである。

- ①上掲の資料からアクセント類の不一致が歴然である。琉球語の語形がA型音調なのに対して、本土語のはB型音調である。
- ②分節音の面では、二音節目の母音の対応が問題になる。奄美大島大和浜方言と徳之島浅間方言のこの語形の i は本土語の e に対応する。伊江島方言のウビユンの第二音節も \*be に遡るもので、\*bi 由来なら \*ウディユン が予測される。石垣方言の ibi(ru)n の第二音節も \*be 由来である（参照：\*be > bi (nabi「鍋」, jarabi「童」, jubi「昨夜」)；\*bi > bi (ubi「帯」, hubi「首」, husabi「楔」)）。
- ③活用も齟齬している。本土語のイビルは五段活用動詞（子音終わり語幹 /ibir-/）なのに対し、南琉球方言の語形は母音終わり語幹 /ibi-/ であることが判る。伊良部島仲地方言では活用は ibii - ibin(否定) - ibiru(命令)であって、母音終わり語幹 /kai-/「変える」の諸活用形の kaii - kain - kairu と同じで、子音終わり語幹 /kair-/「返る」の kaii - kairan - kairi と一線を画している。八重山の石垣方言や鳩間方言には長い語形 ibirun のほかに短い語形 ibin（石垣）, ibun（鳩間）がある。このように短い交代形があるのは母音終わり語幹動詞のみである。

「掛ける」	「浴びる」	「替える」	「帰る」
(石垣) kakirun ~ akin	aamirun ~ aamin	kairun ~ kain	kairun ~ *kain
(鳩間) kakirun ~ kakun	amirun ~ amun	kairun ~ kaun	kairun ~ *kaun

このように南琉球方言の ibirun は子音終わり語幹動詞であると判断できる。北琉球方言では本土日本語の e- 終わり語幹動詞は子音終わり (r- 終わり) 語幹動詞に変化しているから区別はできないが、南琉球方言の資料から琉球祖語形は母音終わり語幹であったと推測できる。

- ④意味にも隔たりがある。本土語の「いびる」の基本的な意味は〈火に当ててじっくり熱する〉であると思われるが、それが〈ゆがく〉, 〈油で炒める〉, 〈いじる〉, 〈しいたげ苦しめる〉などとさまざまに意味が推移している。これとは対照的に、琉球諸方言の ubirun/ibirun は方言間に700キロ以上の隔たりがあるものの、その意味は「燃やすために火に入れる」以外の意味はみられない。

以上の四つの問題はどれほど決定的なものであろうか。①に関しては同系の動詞であるとするれば、日本（本土）祖語において本来のA型音調が無標（多数派）のB型音調に変化

したと考えられないことはない。②の分節音に関しては、この単語の琉球祖語形の \*be を日本本土語の bi に対応させるために、日琉祖語ではこの音節が \*be であって、この \*e が本土語で i に変化したと考えざるをえない（服部1976；1979：113-6）。③の活用の型に関しては、本土祖語、あるいは（南）琉球祖語で当該動詞の活用の型が突発的に変わったとせざるを得ない。このようにいろいろな不規則的な変化などがあったと想定すれば、以上の三つの問題は解決できるが、④の意味の不一致の問題は決定的である。日琉祖語の語形の原意味から本土語はある程度の意味変化の形跡を示しているが、琉球語ではその語形の意味は本土語のさまざまな意味と重ならないばかりでなく、その意味は少しも広がりや変化をみせていない。おもしろいことに、琉球語の ubirun/ibirun と同じ意味の本土語の「くべる」は、ubirun/ibirun と同様、意味の広がりは見られない。

### 3. 琉球方言の「くべる」と本土方言の「くべる」

10世紀中葉以前の成立といわれる『竹取物語』の中にある「火の中にうちくべて焼かせ給にめら〜と焼けぬ」は焼べるの早い例である。「いびる」同様、その使用分布は日本本土をほぼ覆っている。

方言	語形	音調型	出典
岩手県盛岡市	クベル	A	森下（1986：130）
宮城県気仙沼	kuberu	A	山浦（2000：1184）
東京	クベル	B・A	柴田（1985：283）
長野県長野市	クベル	A	近藤玲子氏よりの教示
岐阜県大垣	クベル	B	杉崎・植川（2002：107）
京都・大阪	クベル	A	中井（2002）、吉原（1983：107）
和歌山県有田市	kuberu	A	平山他（1993：5132）
奈良県大和郡山市	kuberu	A	平山他（1993：5132）
鳥取県八東	クベル	B・A	廣戸・大原（1953：20）
岡山市	kuberu	A	平山他（1993：5132）
阿波	クベル	A	とらじろう（日付不明）
香川県高瀬	くべる	A	佐藤（1986：140）
香川県伊吹島	くべる	A	上野（1985：163）
愛媛県 <small>おおみ</small> 大三島 <small>ひがし</small> 肥海	クベル	A	藤原（1988：259）
愛媛県魚島	くべる	A	上野（1990：79）
広島市	クベル	A	馬瀬（1994：87）
島根県松江・出雲	クベル	A	廣戸・大原（1953：20）

島根県浜田	クベル	A <sup>8</sup>	廣戸・大原 (1953 : 20)
隠岐島五箇・浦郷	クベル	A	廣戸・大原 (1953 : 20)
鹿児島県	クブツ	A	橋口 (2004 : 550)

本土のクベル系の動詞の音調型は基本的にA型で、東京などB型になっている方言はそれぞれ独自に無標（多数派）の動詞音調型に変化したものとみられる。本土のクベルと琉球のウビルン・イビルンとを比較すると、前節の①～④の問題はもはや生じないことが判る。アクセント・活用・意味はすべて規則的に対応する。一致しないのは語頭音節のみである。

日琉祖語形に語頭の子音 k があって、それが琉球祖語では不規則的に脱落したと考えるのは穏当なところと思われるが、別の説明があるかも知れない。日本語に<sup>きそ</sup>競ふ～<sup>いそ</sup>争ふの語対があるが、このうち琉球語にあるのは語頭の k のない語形（おもろさうし11-650の「いそゑて」）のみのようである。くべる（本土語）～ うべる（琉球語）も同様に琉球語では k のない語形が使われる。この二つの語対に見られる k ～ Ø の交代が意味のあるものか、それとも偶然なのか、不明であるが、いずれにせよ、本土語の「くべる」と琉球語の「うべる」が同系語であることは疑う余地がないであろう。<sup>9</sup>

南琉球祖語で k のないウベルの語頭の \*u- が i- に前母音化したのであるが、これは同音異義語の「植える」<sup>10</sup> にも起こった音変化である。南琉球方言の語頭の撥音が高母音を含む音節に由来する（参照：nbirun「植える」、nzirun「出る」、nmun「績む」（いずれも竹富島方言））ことは、竹富方言の nbirun は八重山方言形では \*ebe- ではなく、\*ibe- に遡ることを示す。石垣方言では \*i は通常 ĩ になるが、語頭では ĩ は mī, kī, sī の前にのみ現れる（宮城他 2002 : 522-3）ことから、石垣方言の ibi(ru)<sub>N</sub> も \*ibe- に由来するといえる（参照：idirun「出る」、ika「烏賊」、imi「夢」（いずれも石垣四箇方言））。

与那国方言の sanbirun「くべる」は複合語起源の動詞であろう。本土方言では、長野県各地の サックベル や青森県南部の サクベル は「挿し焼べる」に由来するという（馬瀬 2010 : 230 ; 工藤 2008 : 846）が、与那国方言の語形も同じく「さしくべる」に遡ると思われる。与那国方言と本土方言とで独立並行発達によってできた結合形に違いない。

以上、琉球語の「くべる」を意味する動詞は \*ube- に遡ることを論じたが、実は、琉球方言圏内に k- で始まるクベル系の動詞は散見する。

方言	語形	音調型	出典
奄美大島龍郷町浦	kubīrjun		重野裕美氏よりの私信

伊是名島	kubeen	B	伊是名島方言辞典編集委員会 (2004: 217)
久米島儀間	kugijun	B	大道スミ子氏よりの教示
	kubijun	A	昭和8年生の女性よりの教示
久米島西銘	kubiin	B	匿名男性よりの教示
久米島真謝	kubijun	B	前里留美子氏よりの教示
久米島比嘉・ <sup>ぜんだ</sup> 銭田	kugiin	B	江洲良徳氏ほか一名よりの教示
多良間	kubir		高橋 (1993: 103)
	kumir	B	青井隼人氏よりの教示
竹富島	kubirun		前新 (2011: 408)

2節の ubirun/ibirun 系の動詞の一覧表から読み取れるように、沖縄中南部方言からはこの系統の語形は消滅しているようである。代わりに「燃やす」や「入れる」に対応する動詞が使われる。伊是名と久米島で kubijun 系の動詞、しかも本来のA型音調でなく、B型音調になっている語形が使われているのは本来の語形が消滅した地域への本土語からの借用によるものであろう。<sup>11</sup> 新語として無標の音調が付いたと考えられる。南琉球の多良間と竹富島の方言形も同様に借用語であろう。南琉球方言では \*ku が fu/hu に変化した(参照: 多良間— fuci「口」, fusjabi「楔」; 竹富— hubi「首」, huci「口」, husabi「楔」)から、南琉球方言の「くべる」に対応する語形が ku- で始まれば、これはこの単語が ku > fu の変化が起こったのちに移入されたということを意味する。

#### 4. 結語

本稿では琉球方言の ubirun/ibirun 系の動詞は本土語の「くべる」と同系の動詞であって、本土方言の「いびる」とは無関係であることを論じた。南琉球方言の ibirun は一見本土語の「いびる」とは類似するが、活用の型(子音終わり語幹(本土語の四・五段活用)か母音終わり語幹(本土語の一・二段活用))と音調型は対応しないのである。石垣方言のイビルンを本土語のイビルと同項目として収録した徳川(1989)の石垣方言形は宮良(1930)に依拠したものである。宮良(1930)に長い語形 ubirun と短い語形 ubin の両方が掲載されていることから、琉球方言に詳しい徳川宗賢先生は活用の型の不一致に気付かれていたと思われるが、宮良(1930)に音調の記載がないために音調の不对応は知るすべもなかったのであろう。また、仲宗根(1983)の執筆者である仲宗根政善先生も南琉球方言形の活用の型を宮良(1930)からご存じであったろうが、本土のイビルのアクセントを知らなかったために今帰仁方言の語形との音調の不对応に気づかれていなかったと思われる。諸方言の資料がそろいつつある現在では、琉球方言の ubirun/ibirun 系の語形と本土方言の「いびる」は、活用の型のみならず、音調の型も一致しないことが明白になっている。



それに対して、ubirun/ibirun は同じ意味の本土語の「くべる」と、活用も音調型も一致する。

## 謝辞

本稿のために方言資料を提供して下さった岡村隆博氏、中島由美氏、富浜定吉氏、加治工真市氏、重野裕美氏、下地賀代子氏、青井隼人氏、近藤玲子氏に厚くお礼を申し上げます。

また、本論考で報告する久米島諸方言のデータは国立国語研究所の共同研究プロジェクト（消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究）の2013年12月の臨地調査に依拠している。国立国語研究所および諸方言について教示して下さい下さった久米島の方々に対しても感謝の意を表す。

最後に、本誌の匿名査読者から有益なコメントをいただいたことを記しておきたい。ここに感謝の意を表す。

## 註

<sup>1</sup> 同じ格フレーム間の交替は次の動詞の場合にも観察される。

ペンキを壁に塗る / 壁を塗る

荷物をスーツケースに詰める / スーツケースを詰める

<sup>2</sup> (ii)の構文で焼べるの使用を許容しない本土語話者もある。

<sup>3</sup> 徳之島浅間方言に関しては岡村隆博氏から、八重山鳩間方言に関しては加治工真市先生から、(ii)は言わないとの教示を得ている。

<sup>4</sup> 伊良部島仲地方言では umaccu ibii「火をくべる」は可能な表現である（富浜 2013：75）。奄美大島龍郷町浦方言も ?maci-ba kubiroo-jaa「火をくべようね」というそうである（重野裕美氏よりの私信）。

<sup>5</sup> 動詞の音調型は A と B とに分類した。A は 飛ブ・上ゲル・始メル に対応する動詞、B は 持ッ・下ゲル・調ベル に対応する動詞と同じ音調を表す。A音調型動詞は金田一（1974：67-70）の分類での一類動詞、B音調型動詞は二類動詞に相当する。

<sup>6</sup> ibun は表示の文献に、ibirun は加治工真市先生よりの私信による。

<sup>7</sup> [http://www4.plala.or.jp/jitabi\\_yanai/hougen-a.html](http://www4.plala.or.jp/jitabi_yanai/hougen-a.html).

<sup>8</sup> Martin（1987：714）は島根県浜田のアクセントを B としているが、誤記であろう。

<sup>9</sup> 他に「錐」の意の きり ～ いり（九州語, 琉球語）がある。それぞれ「切る」と「入る」の名詞形でなければ、k ～ Ø の交代の一例になるかも知れない。

<sup>10</sup> 「植える」— ibii（伊良部島仲地）, ibi(ru)n（石垣）, ib(ir)un（鳩間）, ibirun（古見）。

<sup>11</sup> 久米島方言に見られる kugi- の二音節目の子音は、kubijun ～ kubiin「くびる」との同音衝突を回避するために起こった音変化であろう。



## 参考文献

- 秋田教育委員会（編）2003.『CD-ROM版 秋田のことば』秋田市：無明社.
- 朝日新聞論説委員室（編）2010.「天声人語」『朝日新聞』2月12日1面.
- 伊是名島方言辞典編集委員会（編）2004.『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会.
- 猪苗代兼郁 1720.『奥州仙臺こと葉いろは寄』（『近世方言辞書 第2輯』所収. 鎌倉：港の人）.
- 井上史雄 2003.『日本語は年速一キロで動く』東京：講談社現代新書.
- 植村雄太郎（編）2001.『種子島方言辞典』東京：武蔵野書店.
- 上野善道 1985.「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40.2：75-179.
- 上野善道 1990.「魚島方言の用言のアクセント」『東京大学言語学論集 '89』53-117.
- 上野善道 2005.「沖永良部島方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』29：1-40.
- 小川晋史 2010.「大宜味村津波方言のアクセント体系」『琉球の方言』34：125-174.
- 長田須磨・須山名保子（編）1977.『奄美方言分類辞典 上巻』東京：笠間書院.
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子（編）1980.『奄美方言分類辞典 下巻』東京：笠間書院.
- 加治工真市 1961.「鳩間方言の音韻体系について」『琉球方言』3：3-55.（琉大方言研究クラブ）.
- 加治工真市 1989.「鳩間方言一食関係語彙一」『琉球の方言』14：32-89.
- 菊 千代・高橋俊三 2005.『与論方言辞典』東京：武蔵野書院.
- 金田一春彦 1974.『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京：塙書房.
- 工藤 祐 2008.『青森南部地方の方言・民俗（資料集）第二巻』私家版.
- 佐藤榮作 1986.「香川県高瀬アクセント所属語彙（用言篇Ⅰ）」『紀要』29：135-160.（神戸山手女子短期大学）.
- 柴田 武（監）1985.『東京語アクセント資料 上巻（あーそ）』（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集）.
- 杉崎好洋・植川千代 2002.『美濃大垣方言辞典』大垣市：美濃民俗文化の会.
- 関谷徳夫 2003.『復刻版 吉里吉里語辞典』東京：ハーベスト社.
- 高橋俊三 1987.『琉球の方言 八重山・与那国島 12』法政大学沖縄文化研究所.
- 高橋俊三 1993.「多良間方言の語彙（中間報告）」『多良間島調査報告書(1)』73-164.（沖縄国際大学南島文化研究所）.
- 東條 操 1951.『全国方言辞典』東京：東京堂.
- 徳川宗賢 1972.「ことばの地理的伝播速度など」服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会（編）『現代言語学』667-687. 東京：三省堂.
- 徳川宗賢（監）1989.『日本方言大辞典 上巻』東京：小学館.

- 富浜定吉 2013. 『宮古 伊良部方言辞典』 那覇：沖縄タイムス社.
- とらじろう（日付不明）『阿波方言—故郷を離れて気づく国訛り—』 <http://www.geocities.jp/jakoba03ya/tora/10hougenn.html>.
- 中井幸比古 2002. 『京阪系アクセント辞典 データCD-ROM』 東京：勉誠出版.
- 仲宗根政善 1983. 『沖縄 今帰仁方言辞典』 東京：角川書店.
- 中本正智 1975. 「語彙」『琉球の方言—八重山石垣島川平方言—』 12-66. 法政大学沖縄文化研究所.
- 中本正智 1977. 「語彙」『琉球の方言—宮古大神島—』 7-67. 法政大学沖縄文化研究所.
- 野崎教景 1840? 『はまおき』（『近世方言辞書 第4輯』所収. 鎌倉：港の人）
- 橋口 満 2004. 『鹿児島方言大辞典 上巻』 鹿児島：高城書店.
- 服部四郎 1976. 「日本祖語の母音体系 例外を追究して得た新しい仮説」『朝日新聞』 6月22日5面.
- 服部四郎 1979. 「日本祖語について・19」『月刊言語』 8.9：108-118.
- 波照間永吉 1999. 『南島祭祀歌謡の研究』 東京：砂子屋書房.
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）1993. 『現代日本語方言大辞典 6』 東京：明治書院.
- 廣戸 惇・大原孝道 1953. 『山陰地方のアクセント』 島根県平田：報光社.
- 藤原与一 1988. 『瀬戸内海方言辞典』 東京：東京堂出版.
- 前新 透 2011. 『竹富方言辞典』 石垣：南山舎.
- 馬瀬良雄（編）1994. 『広島市方言アクセント辞典』 広島：中野出版企画.
- 馬瀬良雄（編集代表）2010. 『長野県方言辞典』 長野：信濃毎日新聞社.
- 宮城信勇 2003. 『石垣方言辞典』 那覇：沖縄タイムス社.
- 宮城信勇・加治工真市・波照間永吉・西岡 敏 2002. 『石垣方言語彙一覧』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-017.
- 宮良當壮 1930. 『八重山語彙』 東京：東洋文庫.
- 森下喜一（編）1986. 『岩手方言アクセント辞典』 東京：第一書房.
- 山浦玄嗣 2000. 『ケセン語大辞典 上巻』 秋田市：無明社.
- 吉原 保 1983. 『東京語・大阪語 アクセント辞典』 私家版.
- ローレンス・ウエイン 2005. 「大宜味村田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』 29：67-85.
- ローレンス・ウエイン 2013. 「竹富島方言アクセントと「系列別語彙」—附 竹富島方言版「北風と太陽」—」『琉球の方言』 37：1-24.
- Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese Language through Time*. New Haven and London: Yale University Press.